

高齢者の「安心・自立居住」を「まち」で支える「地域力」の実践的研究

—コレクティブタウン・モデルの提案に向けて—

主査 延藤 安弘*¹

委員 宮西 悠司*², 乾 亨*³, 森永 良丙*⁴, 森 詳子*⁵, 大森 靖子*⁶

本研究の目的は、創造的まちづくりを通して、高齢者の安心・自立居住の場をもたらす地域力を明らかにすることと、コレクティブタウンのモデルを提起することにある。神戸市真野地区における地域力は、たくさんのチャンス（給食サービスや友愛訪問や多様な地域行事等）、ボランティアによるコミュニケーション的行為や公的地域組織や個々の住民たちの多層の人的ネットワーク、たくさんの居場所（公園、銭湯、喫茶店、路地等）からなる。それは、これら3側面の相互関連性に特徴がある。真野ふれあい住宅という公営コレクティブハウスは、居住者のいろいろな相互関係を成立させており、それは、つづきバルコニーのような空間面の特徴と住み手間の対面状況で話されるコミュニケーションが緊密に結び合わさっている。

キーワード：1)コレクティブタウン、2)コレクティブハウジング、3)安心・自立居住、4)地域力、5)まちづくり、6)人間交流、7)高齢者、8)居場所、9)共同空間、10)住まい方

A PRACTICAL STUDY ON THE COMMUNITY EMPOWERMENT WHICH SUPPORTS THE ELDERLY'S WELL-BEING THROUGH "MACHIZUKURI"

—Towards a Proposal of a Collective Town Model—

Ch. Yasuhiro Endoh

Mem. Yuji Miyanishi, Koh Inui, Ryohei Morinaga, Shoko Mori and Yasuko Omori.

The purposes of this research are to clarify the community empowerment which supports the elderly's well-being through the creative "machizukuri" and to establish a model of collective towns. The community empowerment in the Mano area includes many chances of food delivery services, friendly visiting and various community events, communicative actions by volunteers and multi human networks of formal community organizations and informal members, and many places of parks, public bathes, tea rooms, alleys and etc. It is a mutual relationship between these aspects. The public collective housing in Mano area has different reciprocal actions which are intertwined processes between the physical living environments (ex, open balconies) and the face-to-face spoken communication.

1. 研究の目的

今、とりわけ高齢者にとって、居住条件整備と福祉が一体となった「住み続けていく」ための仕組みづくりは緊急の課題である。高齢者が「地域のなかでの安心しながら自立して暮らす（安心・自立居住）」ことができる状況は、住宅の質や、地域コミュニティ、そして身近な生活施設の存在等などの総体として初めて可能になるものであるとするならば、ここで求められることは「居住—福祉—まち一体型住環境」が地域の物的・社会的環境の編目のなかで緊密に成立することである。このような、一人ひとりの高齢者の安心・自立居住が可能となるような「居住—福祉—まち一体型住環境」を「コレクティブタウン」と名付けるならば、本研究の目的は、神戸市長田区真野地区を調査対象として、コレクティブタウンの

特質とその成立要件を明らかにすることにある。

2. 研究方法

2.1 対象地区の概要

若年層の地区外流出の結果、早くに高齢化社会を迎えた真野地区は、まちづくり活動のなかで福祉活動（友愛訪問・給食サービス等）に取り組み、地域コミュニティのなかで高齢者を支えてきた^{x1)}。震災後「支え合い」の必要性が再確認され、「ふれあいのまちづくり協議会」活動が活性化し、それと呼応して地区内に、公営の「シルバーハウジング（シルバーハイツ）+デイケア+地域福祉センター」や「コレクティブハウス：真野ふれあい住宅」が建設され、このまちの福祉活動は新しい段階に向かいつつある。と同時に、このまちの下町のつきあい

*1 千葉大学工学部都市環境システム学科 教授
*4 千葉大学工学部都市環境システム学科 助手

*2 神戸市地域問題研究所 所長
*5 千葉大学自然科学研究科 大学院生

*3 立命館大学産業社会学部 教授
*6 立命館大学産業社会学部研究科 大学院生

や祭礼（地藏盆など）、そして各種イベント（盆踊りや寒餅つき）は、高齢者に、人と出会い、楽しさを共有する機会を提供しているし、路地の多さ、住工混合地区ゆえの職住近接性や店舗（食堂・銭湯など）の多さといった「まちの形」が、高齢者の暮らしを支えている。

参考のため、地区内町丁別独居高齢者数（65歳以上）を表2-1に示す。

表2-1 真野地区独居高齢者世帯数

地区名	独居高齢者世帯数				地区名	独居高齢者世帯数			
	男	女	合計	残たきり		男	女	合計	残たきり
東尻池3丁目	1	12	13	1	苅藤通2丁目	0	1	1	1
東尻池4丁目	4	17	21	6	苅藤通3丁目	0	7	7	0
東尻池5丁目	9	28	37	2	苅藤通4丁目	2	16	18	0
東尻池6丁目	6	11	17	1	苅藤通5丁目	0	7	7	0
東尻池7丁目	5	13	18	2	苅藤通6丁目	3	4	7	0
東尻池8,9丁目	4	17	21	6	苅藤通7丁目	0	5	5	1
浜通1丁目	1	7	8	0	真野地区合計	37	168	205	22
浜通2,3,4丁目	2	18	20	2					
浜通5-8丁目	0	5	5	0					

2.2 調査概要

高齢者一人ひとりの生活世界の把握を通じて、各高齢者の「安心」と「自立」の状況を知り、それらが何によってもたらされるかを明らかにすることで、総体として地区の備える力を解き明かす。具体的には、「高齢者が自立しつつ支えられる」状況を「まちの構造—まちづくり—福祉活動」のセット性のなかで明らかにすることを旨とする真野地区内独居高齢者調査（第3章）と、「自立しながら支え合う」ことを目指して計画された「真野ふれあい住宅」における「空間構造—地域活動—支え合い」の相互関係を明らかにすることを旨とする真野ふれあい住宅居住者調査（第4章）を行った。

なお、本研究は、真野地区のまちづくりに深くかかわり続けている研究者と、地元組織「ふれあいのまちづくり協議会」（以下「ふれまち」）との協力のもとに行われたものであり、地域の福祉活動に参画しつつ「ふれまち」の今後の課題を明らかにすることを研究の射程に入れている。それゆえ、本研究は対象事例に実践的にかかわりつつ、そこから共有化すべき知識を照察し概念化していこうとするParticipant Conceptualize（参加型研究）であり、単なる実態調査、理論的検討にとどまることなく、現地の状況を創造的に改変する具体のアクションを起しつつ、そのプロセスを誘因・発展させる主体的あるいは客観的要件を明らかにしていこうとする「アクション・リサーチ」²⁾である。

3. 高齢者の生活世界からみる安心・自立居住の仕組み

3.1 調査方法

高齢者に密着し、「行為（買い物等の生活行為、仕事、楽しみ、趣味など）」「他者との関係性（近所、友人、家族、地域組織構成員）」「生活空間圏（行動範囲、先行、店舗名など）」「地域活動の認知度・利用度」「心情（不

安や楽しみ、生き甲斐、真野の評価など）」「生活時間」などについて詳細なヒアリングと行動観察を行い、個々の生活世界を記録化する「定人観察調査」を行った。調査対象者として、「ふれまち」の協力を得ながら、なるべく地域福祉活動の網目からはずれた（民生委員との接触頻度が低い・給食サービス等の行事への参加がない）独居層を選択的に抽出した¹⁾。ちなみに、真野地区の独居高齢者数は1996(平成8)年時で約200名（表2-1）、給食サービス参加対象者は1998(平成10)年時で約70名である。総サンプル数は38である（注1に記すように、対象者の条件確認の困難性から、結果的には給食サービス参加層及び独居世帯以外の家族型も混在）。

3.2 調査結果と分析

3.2.1 高齢者の生活世界の特性

定人調査データはすべて個人別データ化した（例：表3-1）。それをもとに、各人データを相互に比較しうるよう整理したものが表3-2である。この表から読み解きうる真野の高齢者の生活世界の特徴をまとめてみると、

表3-1 個別データシート（例）

A ネットワークタイプ No.31 女 81歳 浜3
 独居 無職 真野在住 50年
 <暮らしの全体像>
 同世代の中でも元気な方で行動力がある。よく歩く。真野地区全体が庭のように感じている。隣人、町の組織と幅広く交流を持ちイベントには必ず顔を出している。給食の場では切っ役。
 <交友関係>
 ・昔からの知り合いが多く、周りとは自然と仲良くしている。
 ・近所とは物をあげたりもらったりの関係
 ・昔駄菓子屋をしていたので常連が今でも訪ねてくる。
 ・幼稚園、小学生が遊びに来る。
 <家族形態>
 長田区に娘がいて電話をしたら自転車に乗って10分で掛けつける。
 <行動の特徴>
 散歩のついでに買物をするので真野地区外の商店街（物も安いし新鮮）へ行く。No.31さんにとって、人との出逢いを求めて、買物（物の安さ・新鮮さ）、健康（散歩の距離）が行動範囲を決める。毎月1,15日は長田神社の祭りに行く。家の中から通る人を見ている。
 <趣味> 散歩、歌謡曲を聞くこと
 <不安・困った事>
 一人暮らしだが不安がない。
 =近隣との助け合い、組織との繋がりも深い、家族が近くにいる。
 <地域福祉センター>
 給食サービスは運動のきっかけ、出逢いの場となるのでよく行く。
 <民生との関わり>
 民生委員を頼っている。（相談役）また、浜2・3・4の民生、友愛訪問グループ8名の名前が言える。
 <デイサービス・ヘルパーとの関わり>
 周りが面倒を見てくれるので必要の無い事が多い。（近隣支え合い）
 <真野に対して>
 ・人に情があるので住みやすいので他の地域には行きたくない。
 ・住民とも組織の人とも強い繋がりがある。（頼り頼られてる）
 ・「歩いてちようどいいまち」と感じている。
 <その他>
 近所の人とは声の掛け合いをし、また外灯を点灯する事が生活安全の確認の合図としている。
 遠くに行く時は目印としてカーテンを開けていく。
 <生活時間>

No31		5:00	7:00	10:30	12:00	13:00	17:00	20:30
就寝	ラジオ 水やり		炊事 長田神社 お祭り	散歩 買物	昼食 TV	子供が遊 びに来る	風呂 夕食 TV	就寝

*長田神社のお祭りは毎月1,15日に行く

以下の通りである。

1) 自立志向＝可能な限り自立していきたい

ほとんどの高齢者たちは、「1人で（または夫婦で）暮らしたい＝自立居住」を望み、できれば人の世話になりたくないと思っている（「自分でできることは自分でする」No.1, 30, 「動けなくなったら病院に入れて」No.6）。同居可能な親族がいても、自分の暮らしを大切にするため、独居を望むケースも多い（「同居は窮屈」No.3, 「子供と暮らすと友人に会えない」No.30, 「ほけると引き取られるので、ほけないように趣味をしている」No.4）。

2) 動けなくなる不安と健康志向

病気等で倒れてしまうことは、独居高齢者の大きな不安である（表3-2のV欄）。そのため、多くの高齢者は、積極的に体や頭を働かせる努力をしている（散歩・趣味）。

3) 「支え合い」のベースとしての「近所」・「友人」ネットワーク

表3-2のI・N・W欄を見ると、下町的な「近所づきあい」が真野の支え合いの基盤をなすことがデータ的にも確認できる。特に、30年以上同じ町に住んでいる者18名のうち、15名が「近所と顔見知り」「よく話す」と回答し、「近所」の存在が「安心＝支え」になっていることがうかがえる。ただ、真野地区居住歴が長くとも、地区内転居者は、近所との関係をうまく築きえていない（No.6, 7, 16, いずれも震災後の転居）。このことから、「近所づきあい」によって支えられる範囲はきわめて狭い（町、あるいは路地内程度）ことが分かる。

また、定住性の高さや、もと職場の同僚（近辺の大工場）がいるという地区の特性から、「近所づきあい」を超えた友人関係が成立し、強い「支え合い」の関係を備えているケースも多い（No.9, 10, 11, 15＝同じ工場OB, No.34, 35＝子供のPTA仲間）。

近所・友人関係は、何よりもそれぞれの高齢者に「自分を知っている人たちのなかで暮らしている」という意味での安心感を与えるものであり、さらに、有事の安否確認システムとしても有効である（「震災の時すぐに近所の人が安否確認に来てくれた」No.4）。

4) 外向性＝働きかける高齢者

当然個人差は大きいですが、真野には外向的で気軽に声をかけ合う高齢者が多い（「友達の友達と友達になる」No.3）。No.12, 31は顔も広く、出歩くたびに多くの顔見知り高齢者と出会い、話しをする。またNo.9, 10, 11あるいはNo.34, 35の友人グループは、そのグループを中核に、ほかの外向的高齢者とも友人ネットワークの広がりを持っている。彼らは、人と出会うことを目的に外出（買い物・散歩）し、行動範囲も広い、高齢者ネットワークのキーパーソンたちである（No.31は給食サー

ビス等では仕切り役。No.10の公園仲間のN氏は、10年前に真野に来て、当初知り合いを作るために公園に来て、No.10を含む公園友達のゆるやかな輪のなかに入るようになって、今では自転車で真野の公園をまわり、顔見知りの安否確認を行っている）。また、高齢者に限らず真野には高齢者に気軽に声をかける住民がいる（「まちを歩いていると知らない人が声をかけてくれる。よその地域では給食サービスの時だけ声をかけてくれるけど、ここでは普段の時にかけてくれる」No.5＝震災後来住者）。

さりげなく高齢者の暮らしを見守る人をLife Watcher（見守り人）と言うならば、上記のごとき「見守り人」の存在は、真野地区が、民生委員や町役員、施設職員だけでなく多層の「支える力」を備えていることを示唆している。それと共に、「身体が動く間は高齢者を支える役に立ちたい」とシルバー人材センターに登録しているNo.26や、地域の子供の面倒をみているNo.31の例も含めて、他者を支えることは、とりもなおさず自分を支える力（生き甲斐）ともなっている。

5) 支え合いを求める新規来住高齢者

古くからの居住者が比較的強いネットワークを形成しているケースが多いのに対し、新規来住層、とりわけ震災後真野地区に越してきた（あるいは地区内転居した）高齢者の場合、ネットワークの弱さと、民生委員や給食サービス等地域福祉活動への疎遠さが目立つ。それでもまだ、シルバーハイツやふれあい住宅では、キーパーソンを中心に施設内での交流が始まりつつあるが（No.17～20）、1人で地域に越してきた層は孤立化の傾向が強い（No.22, 29）。

給食サービスと老人会行事に積極的に参加することで、越してきて3年半で地域になじんでいるNo.5の例や、「地域行事（シルバーハイツ1階の地域福祉センターで行われる給食サービスや交流会）のおかげで、シルバー内で仲良しができた」（No.20）の例が示すように、地域行事はネットワーク形成にきわめて有効であり、そこへの巻き込みが1つのポイントとなる。「しゃべる相手がなくて寂しい」と交流を希求する高齢者も「給食サービスや交流会は毎回参加。もっと機会を増やして欲しい」（No.16）と、その効果を裏付ける。「人と話すのが嫌い」で孤立化志向にみえる高齢者でも、「くす玉を作って人にあげて喜んでもらうのが生き甲斐」「野菜を作って人に配る」など潜在的にはつながりを求めていることがうかがえる（No.32, 33）。

また、「シルバーのなかで（誰か訪ねてきて欲しくて）ドアを開け放している人の家を訪ねた」（No.17）という例は、住居の構造（開放性）がネットワーク形成に有効に資することを示していて興味深い。

6) 「まちの形」が人のつながりを支える

表3-2を見ると、「人と出会う場所」「よく行く場所」

表3-3 安心弁類型

安心弁類型		典型事例No.	安心弁類型		典型事例No.
イ	近所の人とは顔なじみ	2・23・25	リ	自分のしたいことがある(趣味・生き甲斐)	9・26
ロ	行き来する特定の友人がいる	19・24・30	ヌ	決まった場所がある(決まった時間・決まった人)	
ハ	人に出会うために外出する(買い物・散歩・行事)	4・31・34	ヌ-1	銭湯に行く時間を決めて、友達とおちあう	3・26
ニ	身内とのつながりが深い		ヌ-2	銭湯でいつも会う人と友達になる	4・24・25
ニ-1	子や孫がよく来る・会話が楽しみ	9・16	ヌ-3	毎朝同じ喫茶店でモーニングを食べる	4
ニ-2	毎日電話をくれる	5	ヌ-4	行きつけの店がある。 店の人が声をかけてくれるからそこで買う。	22・(21)
ホ	人としゃべるのが楽しい	10・34			
ヘ	人の世話をする、見守る役目ははたす	26	ヌ-5	公園でおちあう…いつもの人がいないと心配	9・10・11
ヘ-1	まちの子供達が遊びに来る	31	ヌ-6	家の前の路地で植木の手入れをしながら 知人と出会う機会をつくる	3
ヘ-2	シルバーの世話役。	18・20			
ヘ-3	真野在住10年のNは、自転車で知人の安否確認をする	10の談話	ル	給食サービスや交流会が楽しみ	16
ト	サークルや会(老人会・趣味の会・OB会など)に所属	5・28・36	ヲ	安否確認のローカルルールを持っている	
チ	頼りにしている人がある		ヲ-1	外灯の点灯が安全の合図	31
チ-1	民生委員・施設職員などを頼りにしている	4・18・38	ヲ-2	表に軍手を吊すのが安全の合図	12
チ-2	特定の知人・近所の人を頼り	16	ワ	安否確保の装備を持つ(緊急通報ボタン付き電話)	38
チ-3	身内が頼り	29・36・37			

として、地域福祉センターやデイケアといった正規の福祉施設のほかに、銭湯・路地・喫茶店・公園・病院(待合室)・商店などまちの生活利便施設が多く挙げられている。11名が「人と会う場所」として挙げている銭湯に注目すると、「銭湯に行く時間が決まっていて、そこで友達に会う」(No.3, 26)「銭湯でいつも会う人と友達になる」(No.24, 25)「銭湯仲間と昼食を食べに行く」(No.4)と、ここが高齢者のネットワークをつなぐ大切な場として機能していることがうかがわれる。また、高齢者にとって「買い物」は単に生活用品を仕入れるための行為であるばかりでなく、健康のための運動であり、また途上で人と出会うという目的もある(No.31, 表3-1)。さらに、地区内の商店は、「いつか世話になるかもしれないから、地区内で買い物をする」(No.35)、「行きつけの店がある。店の人が声をかけてくれるから(うれしいので)そこで買う。いろんな情報ももらうし、寝込んだ時は家まで届けてくれた」(No.22=震災後来住)、表3-4「同じ店に行って、顔なじみになる努力をしている」(No.21=震災後来住)というように、高齢者を支えるネットワークの結節点としての機能を期待されている。

3.2.2 「安心・自立居住」を支える要因

1) 安心弁

先述したように、今回の調査はどちらかといえば地域福祉の網目からはずれた高齢者を対象にしているため、当初は、物理的にも精神的にも支えられていない不安定な状況の高齢者の存在を予想していた。しかし(サンプルの少なさと、条件のばらつきによる誤差はあるとしても)、全体として言えば、多くの高齢者は比較的安定し

た状態で過ごしている(=「安心・自立居住」)。確かに「身体状況」が思わしくない層は相対的に活動性・積極性が低く、「ある程度の活動できる健康状態」は「安心・自立居住」を支える必要条件ではあるが、これまでみてきたように、それ以外にも、高齢者が生活していく上で、心に張りを与え、安心感を生み出す要因があり、個々の高齢者はそれらのうちいくつかの要件を満たすことで、それぞれなりの「安心・自立居住」を実現させているようである。これらの要因を「コミュニティ安心弁」(以下「安心弁」)^{注2)}と名付けるならば、この組み合わせが個々の高齢者に固有の安心・自立居住の仕組みである。これまでの分析をもとに、「安心弁」を類型化したものを表3-3に示す。

既に前節で分析した事象を整理したものであるため詳述は避けるが、これら安心弁は大きく分ければく近所や友人、身内との双方向ネットワークの有無、あるいは質(イ、ロ、ニ)、く近所や友人、身内、地域福祉関係者による支援(チ、ル)、く「自らの積極的働きかけ(ハ、ホ)く生き甲斐や自己実現(ヘ、ト、リ)く」という「ヒトの質、あるいはヒトとヒトとの関係性の質」によってもたらされるもの(=ソフトの安心弁)と、その関係性をうまく機能させる地域特有の仕組みであるく居場所の有無(ヌ)、く安否確認の機構の有無(ヲ、ワ)く(=ハードの安心弁)よりなる。今回の対象者がそれぞれどのような安心弁によって「安心・自立」を可能にしているのか整理したものを表3-2のX欄に示す。

当然、保有する安心弁の種類が多い者は、さまざまな「支え」を備えているという意味において、一般的に言って「大丈夫」^{注3)}な高齢者層である。ただ、表3-2に示

された生活データ内容と照合してみれば、安心弁の保有種類が少ないことが、即、福祉の支援が必要な高齢者とは言い難い。No.2, 23のように、地区全体の福祉の網目から抜け落ちているように見える高齢者も、ごく近所の人の見守りのなかで「安心・自立居住」を行っている様子が読み取れるし（人と出会う場所＝路地）、No.13のように他者とのコンタクトが少ない生活であっても、自分のしたいことをして（この場合は「散歩・墓参り」。午後からは必ず外出する）心に張りを保ち続けているケースもある。とはいえ全体的に言えば、安心弁が少ない者、とりわけイ、ロ、ニを保有しない高齢者は、何らかの目配りが必要な層（「不安定層」と呼ぶ）である（No.6, 7, 21, 22）。安心弁口を持つNo.1も、友人が離れており、それ以外の安心弁を持っていないという点では「不安定層」と見なす必要がある）。

2) 高齢者の支えられ方のタイプ化

安心弁の組み合わせにより、その人の安心・自立居住の支えられ方を5つにタイプ化（表3-4）し、表3-2のY欄に記す。A, C, Dはそれぞれ前述したソフトの安心弁の各グループ〈他者との双方向ネットワーク〉、〈生き甲斐・自己実現〉、〈他者からの支援〉に対応する。Eは「不安定層」に対応するタイプである。加えて、今回の調査のなかで「人とのつながりが欲しい（今はない）」と望む事例や、それに向けての努力している事例がある（No.16, 21, 22）。これはC, D, EからAに移行する可能性を持つタイプと思われるため、B「出会い希求」タイプと名付けた。なお先述したごとく、C, Dタイプは現時点では「不安定層」ではないが、身体状況の変化等によりEタイプに移行する可能性がある。とりわけNo.29, 37のように、老夫婦のみが孤立化しつつ頼り合っている場合、いずれかに万一のことがあった場合Eタイプ化する。このことやBタイプの要求を考えれば、やはりAタイプの裾野をいかに広げていくかが「ふれまち」の大きな任務と言えそうである。

表3-4 安心自立居住の「支え」のタイプ

A「ネットワーク」タイプ	支え、支えられる対人関係を持つ 近所と顔なじみ・人と話すのが楽しく、積極的に交流・外向的 親しい友人がいる・子や孫（それに類する者）に会うのが楽しみ
B「出会い希求」タイプ	知り合いをつくる努力をする。機会を求めている
C「自己完結」タイプ	趣味・仕事などの活動で満足を得ている
D「他者依存」タイプ	地域組織の人や特定の知人、身内などを頼りにしている
E「孤立」タイプ	なるべく他者と関わらず、一人で生きる

3.2.3 高齢者を支える仕組みの評価

これまで真野地区の地域福祉活動の紹介は多くなされてきたが、働きかけられる側（高齢者側）からその効果を検証する機会はなかった。本調査は「評価」を主目的としたものではないが、ヒアリングの過程において、高齢者側からみたこのまちの福祉の仕組みの有効性についていくつか確認することができたので、それらを箇条書

的に整理しておく。

1) 民生委員・友愛ボランティア・町会長・婦人会

これらの人たちの認知度、信頼度には大きなばらつきがある。組織を認知しているのではなく特定の個人との関係として捉えるため、よく訪ねてくれるから認知し信頼することになる。とはいえ、最後の安心弁として民生委員の役割は重要である（No.38）。また、町会長さんがよくしてくれるという話や、婦人会の人が地域行事の案内をしてくれるという話も語られていて、多くの地域組織の人の輪のなかで支えられている状況が読み取れる。

2) 行事・祭の有効性

給食サービスや老人会行事等が出会いの場を提供し、友人関係の形成に寄与している。そうした直接的効果と合わせて、「行事があるから外出する」あるいは「行事がある時に友達と誘い合わせて出かける」（No.3, 8）「毎月長田神社の祭礼に行き、帰りには決まった店でコロッケを買ってきておかずにする」（No.31）など、高齢者が行動を起こすきっかけ・理由付け、あるいは生活の区切りとしても意味を持つことが明らかになった。

3) 多層の情報チャンネル

行事などの情報は民生委員や町役員、婦人会など世話役や掲示板によってもたらされるほか、近所や友人の口コミ、あるいは店の人から（No.22）もたらされ、銭湯や病院の待合室（No.4）は重要な情報交換の場である。また、6名が情報源として地域新聞「真野っ子ガンバレ!」を読んでいると語っており、この新聞が高齢者を支える役割を果たしていることも明らかになった。

3.3 まとめ

今回の調査からみて、高齢者一人ひとりの生活世界が異なるがゆえに個々の支えられ方は多様であり、決して単一の方法だけでフォローすることはできないことは明らかである。例えば地域福祉センターやデイケア、民生委員と友愛訪問ボランティア、給食サービスという仕組みは、ぎりぎりの線で高齢者を支える（welfare）ためには不可欠のものであるが、真野地区の高齢者の「安心・自立居住」（well-being）は決してそれだけに頼るものではなく、多種多様な安心弁の組み合わせによって成立している。そしてそれを成立させているものは、第一に、給食サービスや友愛訪問等の地域福祉活動や各種まちづくり行事の充実（たくさんのチャンス）、第二に、民生委員や友愛ボランティア、婦人会、町内会役員やあるいは施設職員という地域組織構成員～近所・友人～身内という多層の人的ネットワーク、そして第三に、公園、銭湯、店舗、喫茶店、路地など、ネットワークの結節点となりうる居場所に満ちた「まちの形」（たくさんの居場所）という、3つの要素のセット性・相互連関性にあることが実証された。この相互連関性こそが真野コレクテ

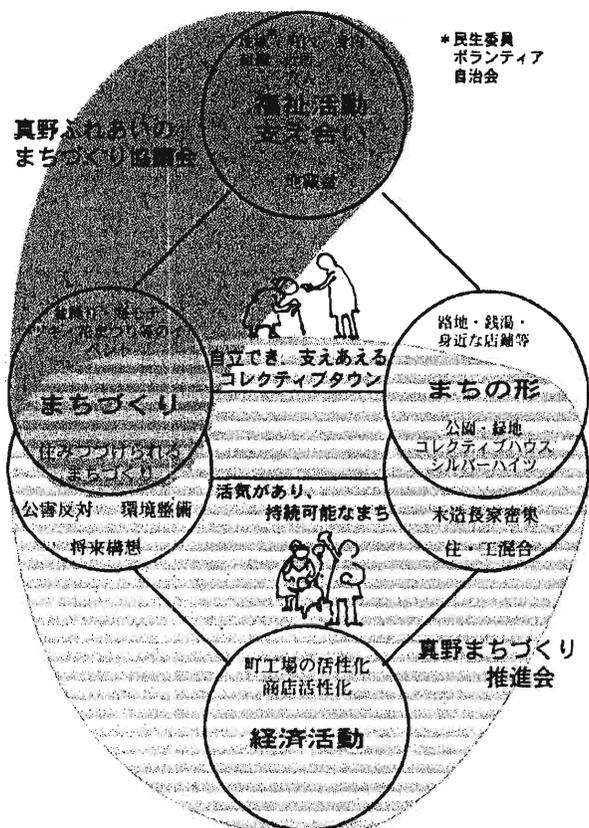


図3-1 真野コレクティブタウンの構造

イブタウンの本質だとするならば、Aタイプの裾野を広げ、Bタイプの希望に応え、Eタイプをフォローし、C、DタイプがEタイプ化しないような状況を創り出すためには、福祉組織活動の充実を図ることや、地域内での交流イベントを活性化させることと合わせて、「まちな形」、すなわち銭湯や店舗、あるいは低廉な住宅（労働者住宅）、路地性を継承持続させていくことが求められる。真野において、福祉活動や行事は「ふれまち」、「まちな形」及びそれを支える経済活動（町工場の存在が生活施設を支える）は「真野まちづくり推進会」が担ってきたが、今後は両課題に総合的に取り組む視点が求められる。以上を概念化したものを図3-1に示す。

4. コレクティブハウスにおけるゆるやかな人間交流

4.1 本章の目的

4.1.1 目的

コレクティブハウジング（以下CHと略す）とは、「居住者が自分の生活を営みながらも一方で同じ住宅・地域に住む人と集まって何かを共に行い個々の生活では得難い『集まる』機会を与え、『共に行うことの楽しさ』を共有することで、個々の生活をより充実させようという住まい方である」とここでは定義する。

その評価のためにここでは、「ゆるやかな人間交流」という視点を立てる。「ゆるやかな人間交流」とは、「隣のあばあちゃん元気かな」「おかず作りすぎたから隣に

あげよう」という自発的な気持ちや、「声かけ」、「おすそ分け」といった行動を創出することを言う。相手を感じる気持ち、「声かけ」などの何気ない行動が人間交流を創り出し生活に新たな1シーンを生み出す。と共に特に高齢者にとって喜ばれ、安心させる1つの要因となる。また、災害・緊急時にはネットワークとなって活躍する。本音は、このような人間交流の視点から、真野地区のCH（真野ふれあい住宅）の評価を行い、高齢者の「安心自立居住」のハード・ソフト両面のあり様を明らかにすることを目的とする。

4.1.2 調査概要

真野ふれあい住宅（以下、真野住宅^{注4)}の各居住者へのヒアリング（入居前と入居後1年半時）及び住戸採集。単に聴き取るだけでなく、食堂での催しへの参加・手伝いを行った。催しへの参加・手伝い等を通して居住者との親交を深め、できるだけインサイダーとしての立場での調査に努めた。

4.2 ゆるやかな人間交流の背景

4.2.1 震災前後の居住状況

居住者の半数以上が震災以前に「おすそ分け」も含めたゆるやかな近所づきあい（人間交流）を体験している。また、震災により精神的・物質的貧困な生活を強いられた。このなかで被災者の多くが、特に隣近所とのつながりの大切さを再認識している。またその後の仮設住宅ではいわゆる「裸のつきあい」が生じ、居住者の多くが仮設住宅で「おすそ分け」や隣人を気遣う生活を体験しており、このことは真野住宅においてのCHを実践するに当たりプラスに働く要因となりうる。

4.2.2 設計・入居前トレーニングの参加状況

真野住宅では入居者が決定した段階で7回の懇談会を行っている。入居者間の交流、またCHの学習という目的で行われており、入居前から居住者の人間関係を生む機会を設けるなど人間関係の醸造も視野に入れた計画作りを行った（表4-2参照）。

4.3 まわりとのかかわりにおける住まい方の特徴

4.3.1 共に住まう生活への工夫

入居当時は「防犯性」「プライバシー」の面において住民から不安の声があったが、今年の夏はほとんどの住戸の玄関、掃き出し窓が昼間常時開けられていた（外出中を除く）。玄関や窓を開放すると住戸内のほとんどすべてが廊下通過者の目にさらされる。通行人を気にしない住人もみられたが（Km, R2さん）大半は外部からの目線に対してさまざまな防御策を練っている。玄関まわりに見られた傾向は完全に遮断するのではなく「のれん」「簾のつい立て」などで視覚的に閉じることなく、ゆるやかな心理的距離を生み出している。

表4-1 全居住者の年齢構成 (Tjさんを除く、1999年4月現在)

	5才~	15才~	25才~	35才~	45才~	55才~	65才~	75才~	85才~	計
男性	1	0	0	2	1	1	2	2	2	11
女性	1	0	1	2	1	5	7	7	3	27
計	2	0	1	4	2	6	9	9	5	38

また遠出以外の外出は、バルコニー側の掃き出し窓を利用しての住民 (Ok, R2, Iw, Km, Ktさん) がいる。つづきバルコニーが生活動線となっていることを嫌がる人はほとんどいない。それは生活動線として住人が通過するのが日常化しているためである。逆に隣人がしばらく通過しないと、気になるという隣人を気遣う意識がここには育まれている。

4.3.2 「声かけ」, 「おすそ分け」そして「ルール」

つづきバルコニーが日常生活動線として定着すると、さまざまな出来事、関係、ルールが生み出された。

(307) のR2さんは夕食の用意をする暇がなかった時など、ご飯の「おすそ分け」を (309) のMtさんのところへお願いしに来る。そのようなこともあるためMtさんは日頃から食事は多めに作る。出来がよければ隣の病気で閉じこもりがちな、(308) のOtさんに「おすそ分け」をしている。また「食」のおすそ分けに限らず「和紙工作」で作った棚などを気心の知れた人びとにあげている。

(208) のOkさんは基本的に1人で静かに生活することを好む人であるが、隣人の (207) のMkさんの体が不

自由なため気遣いよく話し相手になってあげている。Mkさんが「お隣り」ということに加え「高齢」であるため、外出する時もひと声かけることにより、安否確認をする「見守り」人となっている。またそこには異性であるから失礼が生じないように必ず玄関から声をかけるというルールも生まれている (図4-1参照)。

4.3.3 「閉じた」住まい方をやわらかく見守る

入居者のなかには高齢・障害などのため交流の少ない「閉じた」生活を送る人もいる。一般入居者のなかでそのような人びとをやわらかく見守る動きが芽生え始めている。

(302) のKmさんはTyさん (303), Odさん (304), Otさん (308) などの閉じこもりがちな居住者のところには2日に1回は顔を出す。(311) のKtさんはArさん (104), R1さん (204), Mkさん (207), Otさんといった自分のフロア (3階) であるかどうか関係なく「声かけ」に回っている。Otさんは「感謝の印」としてKtさんの物干し竿にタバコをつり下げることもある。

(202) のMnさんは昨年会長をやっていたこともあり、1人での生活が困難な居住者を把握しており、そのような人びとのところは毎日訪れ、場合によっては買い物・ゴミ捨てなどを行っている。Tyさん (303) が以前住戸内で倒れた時、Mnさんが発見し、救急車の手配、大阪の娘さんへの連絡を迅速にして、大事には至らなかった。これは彼女の日頃の「見守り」の重要性を訴えている。

表4-2 真野ふれあい住宅居住者の属性

住戸	居住者					住戸		入居前・応募			ワークシヨップ		食堂でのイベント				備考	
	氏名	年齢	性	職業	家族形態*1	型*3	高齢*4	グループ*5	仮設名	震災時	入居年	計W*6	準W	食事会*7	誕生日会	映画会		モ1
101	Ms	81	男	無職	M(良),F(良)	2		個人	菅の台	長田区	98.1	0	4	○	○	○	○	○
102	My	57	女	パート	F(良)	2		A	南尻池	長田区	98.1	2	4					
103	Iw	86	女	無職	F(病,障)	1	○	個人	-	兵庫区	99.3	0	0	○			○	○
104	Ar	89	女	無職	F(障)	1	○	B	東須磨	長田区	98.1	0	4		○		○	○
105	空室					1	○											
201	空室					2												
202	Mn	70	女	無職	F(良),Dg(良)	2		C	長楽	長田区	98.1	0	4					○
203	Ke	74	女	無職	F(良)	1	○	B	東須磨	長田区	98.1	0	4		○		○	○
204	R1	89	女	無職	F(障)	1	○	個人	-	長田区	98.1	0	3	○	○	○	○	○
205	Ku	84	女	無職	F(障)	1	○	C	長楽	長田区	98.1	0	3					○
206	Wh	84	女	無職	F(障)	1	○	D	長楽	長田区	98.1	0	4					○
207	Mk	91	男	無職	M(障)	1	○	D	長楽	長田区	98.1	0	4				○	○
208	Ok	74	女	無職	F(良)	1	○	B	東須磨	須磨区	98.1	0	4					○
209	Tm	72	男	無職	M(良),F(良)	2	○	個人	西神	長田区	98.1	0	4					
210	Sk	89	女	無職	F(障),Dg(良)	2	○	D	長楽	長田区	98.1	0	4					○
211	Tj			データなし		2	○											
212	Eh	36	女	会社員	F(良),S(良),Dg(良)	3		個人	-	長田区	98.1	0	4					○
301	Tn	41	男	会社員	M(良)	2		A	南尻池	長田区	98.1	0	3					
302	Km	55	男	無職	M(良)	2		A	南尻池	長田区	98.1	1	4					○
303	Ty	88	男	無職	M(障)	1	○	個人	菅の台	長田区	98.1	0	3	○				○
304	Od	80	女	無職	F(良)	1	○	個人	第4	長田区	98.1	0	4	○	○			○
305	Kw	66	女	無職	F(病,障)	1	○	個人	-	長田区	99.3	0	0	○		○		
306	Se	72	女	無職	F(良)	1	○	個人	学園東	長田区	98.1	0	4	○	○			○
307	R2	63	女	無職	F(良)	1	○	D	長楽	長田区	98.1	0	4	○	○	○	○	○
308	Ot	79	女	無職	F(障)	1	○	C	長楽	中区	98.1	0	3					○
309	Mt	67	女	無職	F(良)	2	○	C	長楽	長田区西	98.1	0	4	○				
310	Iz	70	男	無職	M(良),F(良)	2	○	個人	南尻池	長田区	98.8	3	0	○				○
311	Kt	67	女	パート	F(良),Dg(良)	2	○	E	南尻池	長田区苅	98.1	3	4					○
312	Ka	80	男	無職	*2	3		C	長楽	長田区腕	98.1	0	4	○	○	○	○	○

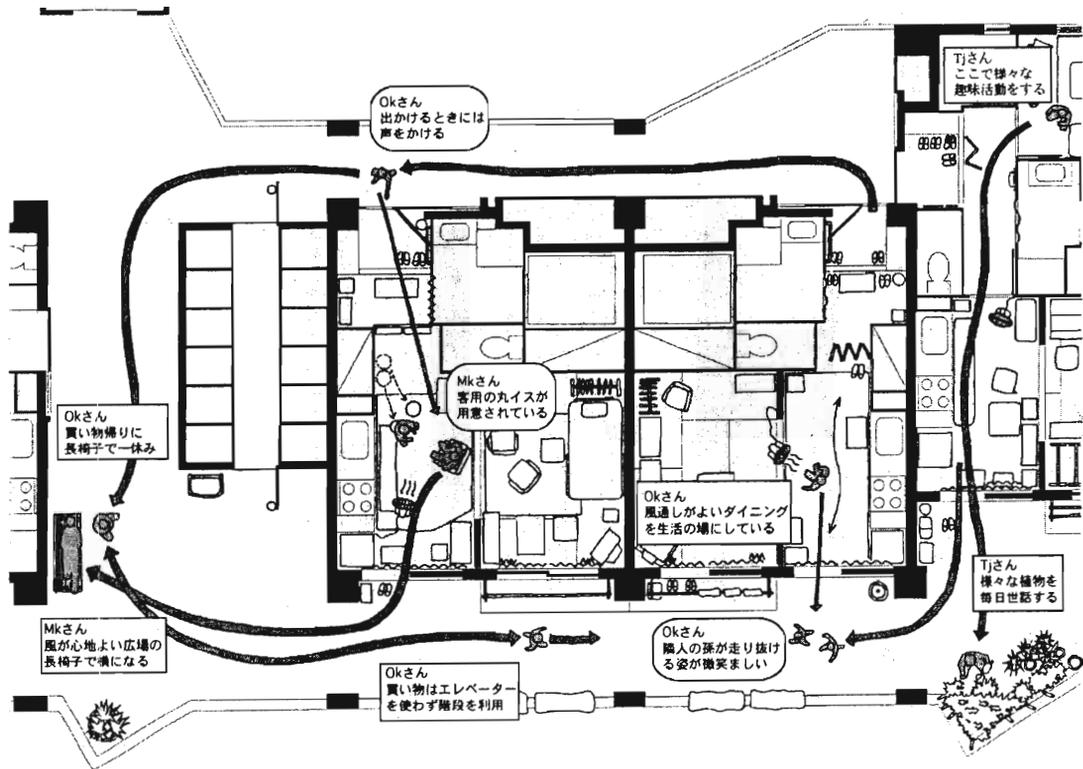


図4-1 Mkさんを見守るOkさん

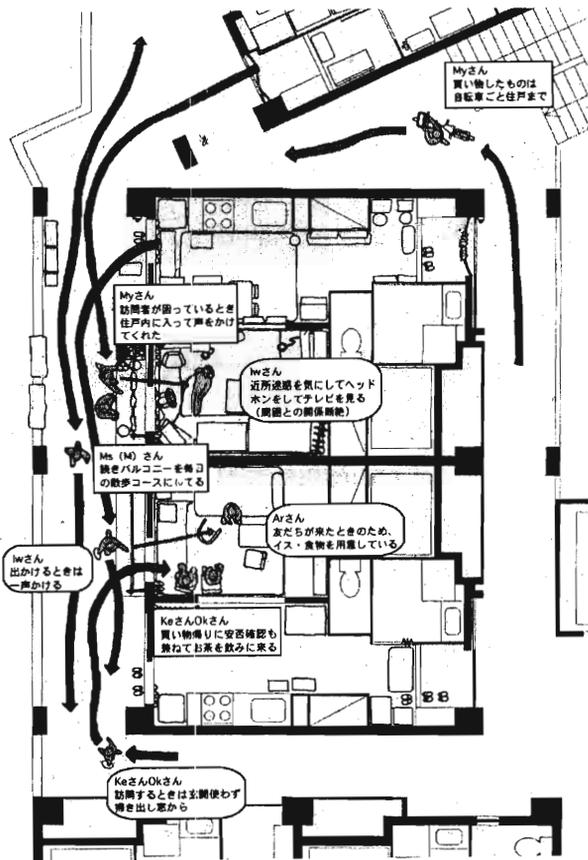


図4-2 つづきバルコニーでの人間交流

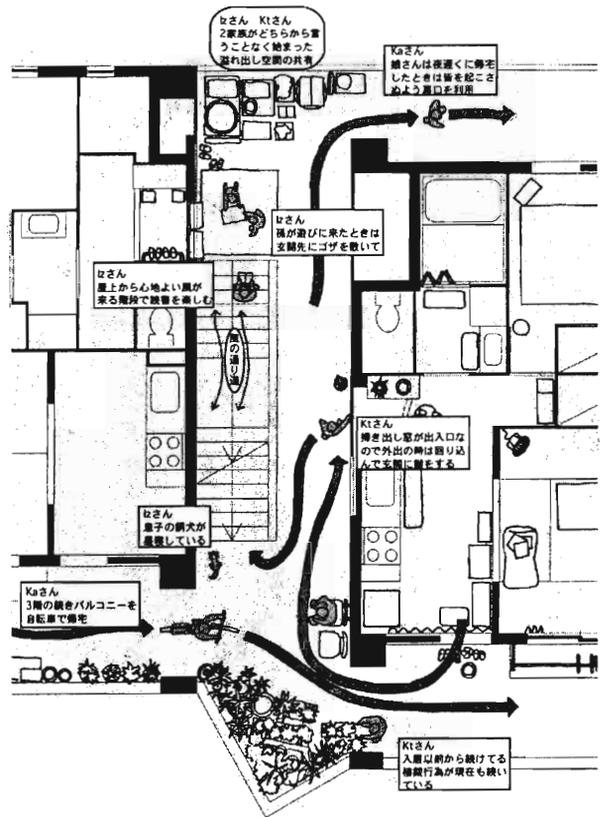


図4-3 Izさんの気持ちのいい場所

4.3.4 CHで育まれた交友関係

CH内における交友関係において、震災前の居住地区・仮設住宅での共同生活は重要な要素となっている。

Msさん(101)とSeさん(306)は震災以前に居住地は一緒であったが、顔見知りぐらいの関係であった。しかし、真野住宅入居後、再会したことをきっかけに急速に交友を深めていった。現在はSeさんは買い物帰りには自宅までの帰宅ルートとしてMsさんの家に必ず寄るほか、2人で遊びに行くという関係が生まれている。

Kmさん(302)とKtさん(311)は仮設で生活を共にして以来、現在も家族同然の交友を行っており真野住宅にはグループ入居してきた。さらに8月に(310)に入居したKtさんの親族のIzさんを含め、この3家族は真野住宅でのCHを自分たちにとってプラスになるよう楽しみながら生活を送っている。一緒に旅行に行ったり屋上で菜園・花火見物・飲み会をするなど真野住宅内外において活動の場を見だしている。またこの3家族のみの閉じたコミュニティにすることなく、他の住民を巻き込んで活動している。

4.3.5 生活におけるホスト・ゲスト関係(相互扶助関係)

Arさん(104)、Keさん(203)、Okさん(208)は、仮設住宅で生活を共有した仲である。Arさんは足に障害を持つため自由に出歩くことができない。これをKeさん・OkさんがArさんの買い物をするなどサポートしつつ、Arさんはお茶や果物などを買って来てはKeさん・Okさんをもてなすといった交友を楽しんでいる。(図4-2参照)

4.3.6 家族交流による住宅の豊かさ

Izさんのところにはよくお孫さんが遊びに来る。そんな時、夏にはいつでもIzさんは玄関前にござを出して涼しい階段の踊り場で腰を降ろしてお孫さんが遊ぶ姿を見守っている。この踊り場は、屋上へと続く扉を開けると風が舞い込んで来てとても涼しい場所となる。このような気持ちいい場所をIzさんは見つけ出しているのである。Izさんのほかにも真野住宅にはよくお孫さんが遊びに来ており、こんな時子どもにとって「つづきバルコニー」は子供たちの格好の遊び場ともなっている。(図4-3参照)

4.4 共同空間における人間交流

4.4.1 共同空間の使い方の変化

食堂における使い方は、徐々に熟成されてきている。1998(平成10)年度は入居初年度ということでの戸惑い、また共益費の高騰の懸念から「懇談会」でイメージされていた《いつでも自由に使える》状況はなく、使われること自体が少なかった。しかし、1999(平成11)年度に入り世話役の役員が改選され、昼間は食堂を開放し、積極的に真野住宅外からの支援を取り入れ、周辺地域との交流を図るよう変化していった。この変化のきっかけは、

1人の居住者の送別会であった。ホスピスへと転居される居住者のために担当医、踊りの先生を呼んで盛大な送別会を行った。周辺地域の住民も巻き込んだこのイベントの成功は、以後《およそ毎週1回食堂での催しが開催される》状況を創り出す契機となった。また、これまで地域に対して閉じがちだった真野住宅は、このイベントを機に積極的に食堂での催しを開放するようになる。現在は、昼間の開放は中止となったが食事会、誕生日会、映画会、モーニングサービスとおよそ毎週1回食堂で催しが行われている。(図4-4参照)

4.4.2 食堂での催しによる人間交流

最近の各催しの参加者数は、モーニングサービスで毎回60名前後の参加があり、食事会で50名前後、誕生日会、映画会で20名ぐらいという状況である。

各催しに参加する居住者は大体決まっている。外部の住民については、特に真野地区で行っているモーニングサービスの参加者層との重なりが大きい。また、居住者との関係がある人も多く参加しており食堂での催しがお互いに会う1つの「機会」になっている。

4.4.3 運営上の問題点

使われ方の頻度は高くなったものの、支援体制の整備についてはまだまだ課題が残っている。課題は大きく2つ、金銭的な支援と人的な支援である。費用に関しては、現在食事会が200円、その他が100円となっているがこれでは採算が合わず、足りない分は教会など外部の支援団体のカンパや、一部の居住者負担で賄っているという状況である。また、人的支援に関しては居住者に後期高齢者が多いため、比較的まだ健康な高齢居住者、一般住戸の若い居住者に頼る面が大きく、この手伝いを負担に感じている居住者もいるという現状である。

長期的に活動を続けるためには資金源の確保・外部からの人的支援、また新しい入居者の選定も含めてこれから検討していかなくてはならない。

4.5 開かれた住まい方の隠された因果性の発見

この真野住宅で「声かけ」や食堂での催しが行われている背景には、震災による「仮設住宅での共同生活」が果たした役割が非常に大きい。避難所・仮設住宅での生活は「隣近所との交流の大切さ」を改めて気付かせた。震災以前母親に家事を任せっきりだったKaさんの娘さんは震災を機に洗濯を週に3回、買い物2回と6人家族の家事を一手に引き受け、Otさんへの「声かけ」や食堂での催しの手伝いもするパワフルウーマンへと変身した。薄壁1枚で隣り合う生活で他者への気遣い、他者を思う心が育まれ、そのことが真野住宅に生かされている。

「仮設住宅での生活体験の大きさ」が目立つ結果となったが、この貴重な仮設住宅での体験を真野住宅で生かすために「グループ入居制度」や「つづきバルコニー」

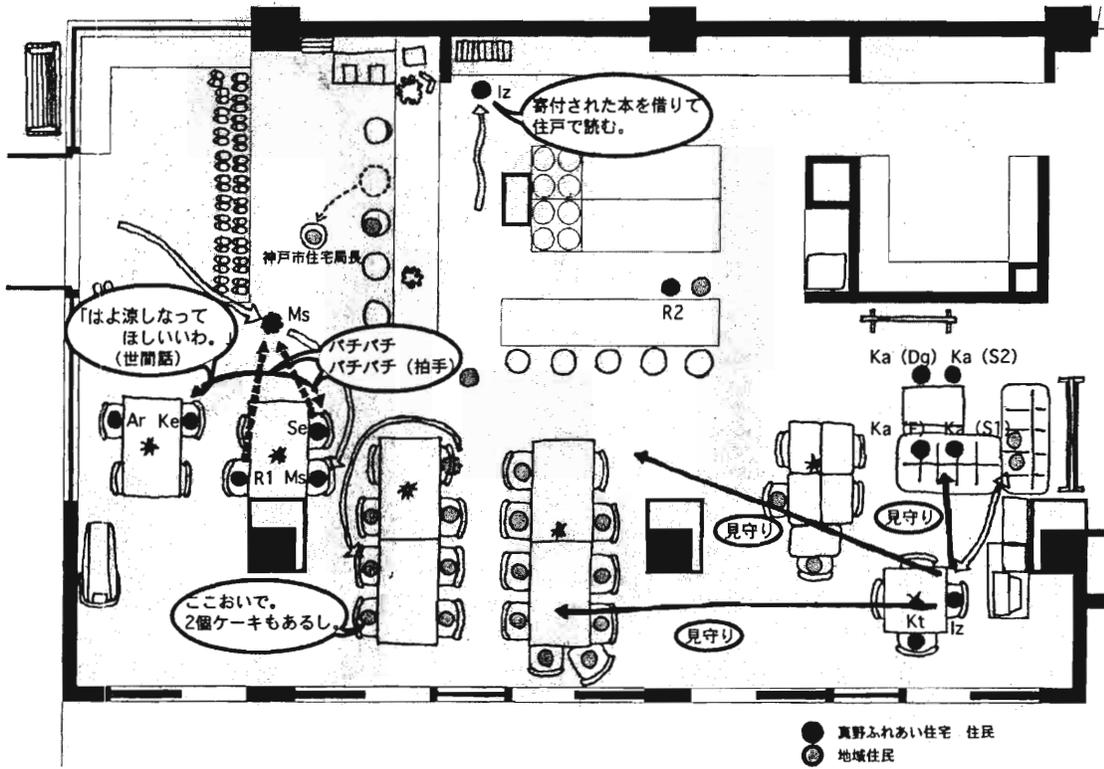


図4-4 共同食堂での誕生日会

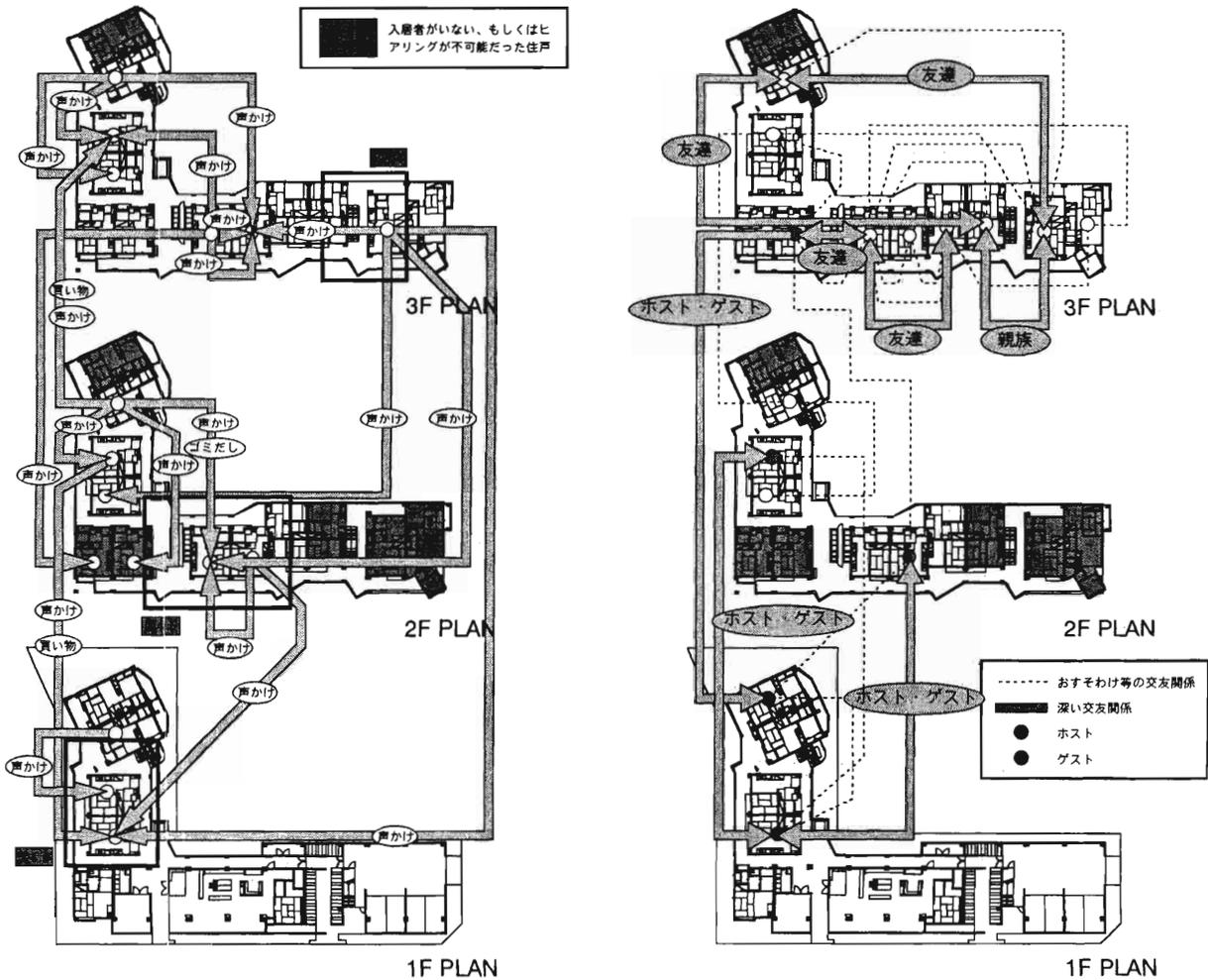


図4-5 住宅内のゆるやかな人間関係

の果たした役割も大きい。さらに真野住宅でCHの実践を支援する外部のサポートがあって地域に開かれるようになったことは、CHを新たに浸透させていくには外からの支援も必要であることを明示している。

この調査を通じて、隣近所との交流の大切さを《体験する》「機会」とそれを次の住まいに《活かす》いくつかの「サポート」が重要であると感じた。CHという住まい方の実践には、まず人と交流すること、すなわち相手を知ること、そして相手を思うこと、これが「ゆるやかな人間交流」の目指すところである。小さな行動で生活のバリエーションが広がり、ひいてはこれが災害・緊急時に役立つネットワークとして働くことになる。

5. まとめ

本調査は、神戸市真野地区における高齢者の「安心・自立居住」を、地区内居住の一般の高齢者の状況と、公営コレクティブハウジング（真野ふれあい住宅）の住まい方の評価・考察で行った。それぞれの調査結果の要点は先述したので、最後に、これらを通してうかがえるコレクティブタウンのモデルの要件を記して最後に備えたい。

これからの高齢者の集住福祉コミュニティの実現のためには、次のような諸条件を満たすコレクティブタウンづくりが必要である。

①自立しながら支え合える

- 1) 住・商・工・福祉・楽遊などの〈多機能混在・職住近接のまち〉
- 2) スマートな個人主義とゆるやかな豊かな共同性を精妙に結び合う〈老若多世代混住体〉
- 3) 緊張感のある異質な元気を交流する〈まちづくり人ネットワーク〉

②たくさんの居場所

- 4) 住民の利用・運営しやすい〈制度的福祉・生活施設〉
- 5) 多様なやわらかい大小の〈ふらりと立ち寄れる場所〉
- 6) 路地のような安心できる〈歩きたくなる道〉と喫茶店や銭湯や公園などの〈ふらりと立ち寄りたくなる場所〉

③たくさんのチャンス

- 7) 多世代・同世代にわたる〈人と人の交流〉
- 8) 四季折々の多彩な〈楽しい行事・イベント〉
- 9) 安否確認・話し相手など〈多面的友愛訪問活動〉

これらの諸条件は相互にからみ合っただけでコレクティブタウンが生成していく。

「コレクティブ」は、「グループ」のように個人の集合ではなく、むしろ個人の集合を超えた存在であることに留意したい。コレクティブの発想は、したがって、異質

性や意外性を抑圧せず、たゆまず、生活実践的思慮に満たされたコミュニケーション行為を重視する。コレクティブタウンでは、高齢者同士の間柄、及び高齢者と他世代との間柄づくりにおいて、ゆるやかに連帯した協働・共同生活が瞬間ごとに更新されていく未来に開かれた状況づくりが肝要である。

今後、コレクティブタウンに適した空間像と生活像とそれらの相互浸透関係についての実践的検討をさらに重ねていきたい。

<注>

- 1) 調査は、1997(平成9)年夏の予備調査によって調査の方法及び視点を明確化した上で、1998年夏及び秋の2回に分けて行った。対象とする高齢者の抽出は、予備調査段階では、なるべく多様なタイプの独居高齢者の選定を地域民生委員に依頼し、4名の対象者の調査を行った(表3-2 No.4, 26, 27, 31)。ただ、民生委員とつながりが深い(民生委員が紹介できる)高齢者は比較的外向的な方であるのに対し、「ふれまち」の求めるデータは、これまでの地域福祉活動で支援しきれていない層の実態と今後の取り組みの方向性である。1998(平成10)年調査においては、婦人会と本研究班学生グループが協力して、真野ふれあい住宅1階食堂において高齢者対象のモーニング喫茶サービスを行い、学生グループが給仕ボランティアとして、訪れた高齢者と交流した。主な目的は、既存の給食サービスに加えて新しい高齢者の場を創り出すボランティア活動であるが、それと同時に、新たな(民生の把握していない)高齢者と接触し、ヒアリングに協力していただける関係づくりを意図し、主に、喫茶に1人で来た、話し相手がいない人を中心に調査を依頼した。秋期調査では、延べ1,147名(実数221名)のモーニング参加者リストから、給食サービスに参加していない独居高齢者を選定し対象とした。
- 2) ここで言う「安心弁」とは、必ずしも物理的な意味での安全確保のためのシステムではなく、個々の高齢者の「安心」感を支える仕組みのこと。
- 3) ここで言う「大丈夫」とは、新たな福祉サービスの対象と考へなくてよいという意味。
- 4) 「真野ふれあい住宅」とは、神戸市営コレクティブハウスとして、1998(平成10)年1月竣工・入居したもの。29戸のうち、21戸が高齢者向け。真野地区の浜添3丁目に建った1,214㎡のRC造3階建。

<参考文献>

- 1) 延藤安弘、宮西悠司：内発的まちづくりによる地区再生過程－神戸市真野地区のケーススタディ、大都市の衰退と再生、東京大学出版会、1981年
- 2) 舟橋国男：ワークショップにおける参加の意味、地域開発、pp.9～13、日本地域開発センター、1996. 12
・高橋重宏、宮崎俊策、安藤丈弘：ソーシャルワークを考える、川崎書店、1981年

<研究協力者>

立命館大学 乾ゼミ/1997、1998年度3年生
千葉大学 延藤研究室(飯田耕介・高宮大輔)